62nd Internationale Filmfestspiele Berlin Forum
ベルリン国際映画祭
フォーラム部門
正式出品作品

フタバから遠く離れて
NuclearNation

福島県双葉町、町全体が丸ごと移住という前代未聞の事態に直面した。

福島第一原発の5号機と6号機が立地していた福島県双葉町。事故後、町全体が警戒区域となり、急遽1423人が約250km離れた埼玉県の旧騎西高校へ避難。地域社会丸ごとの移転という前代未聞の事態となった。激変した環境の下、住民たちは1年半余りをいかに過ごして来たのか？　本作は、そんな福島県双葉町の避難生活を描いたドキュメンタリー。ある日突然、故郷とともに全てを失った町民の日常を、9ヶ月間にわたって寄り添い記録した。

テーマ曲・坂本龍一「for futaba」、監督・舩橋淳
原発事故という嵐に立ち向かう双葉の住民の姿に、
ベルリン国際映画祭で満員の観客が温かいエールを送った。

監督の舩橋淳は頻らずも広島の被爆二世にあたる。いつ爆撃できるかもわからず、賠償もされず、待たされるだけの避難生活を余儀なくされながら、それまで原発を推進していたことで自業自得とも罵られる町民に対して複雑な思いを抱き、そのありのままを描こうと考えた。足繁く避難所へ通い、時にはボランティアもしながら双葉町民と信頼関係を築き、彼らの日常の延長線上にある原発政策の矛盾をもあぶりだしていく。また、本作に共感した音楽家・坂本龍一がエンディングテーマ曲「for futaba」を提供。舞台挨拶に立ったベルリン映画祭での上映では「双葉の人たちに感情移入して何度か泣いた。日本の原子力政策を変えたい。」と述べた。

62nd Internationale Filmfestspiele Berlin Forum
ベルリン国際映画祭 フォーラム部門 正式出品作品
香港国際映画祭 ドキュメンタリー部門 コンペティション
ベルギー・ヒューマンライツ国際映画祭 コンペティション
韓国・ソウル環境映画祭 コンペティション
英・エディンバラ映画祭
伊・ボローニャ映画祭

2011年3月11日、双葉町民は1号機の水素爆発を耳にし「死の灰」を被った。町は全面立入禁止の警戒区域となり、1423人が約250km離れた埼玉県の高校へ避難。地域社会丸ごと移転したこの高校は、まさに現代のノアの方舟と化した…

双葉町の旧騎西高校へ避難した町民たちは、3ヶ月間、双葉町民は1号機の水素爆発を耳にし「死の灰」を被った。町は全面立入禁止の警戒区域となり、1423人が約250km離れた埼玉県の高校へ避難。地域社会丸ごと移転したこの高校は、まさに現代のノアの方舟と化した…

今回の事故で日本政府と東電の対応はとても似通っていた。事実の公表をさけ、「健康にただちの被害はない」という文言に終始する。肥大する政府不信と東電不信…日本国民だけでなく、世界中からも不信を買ってしまった…国が推進してきた原子力政策。それが破綻を来し、危険だという理由から、警戒区域の中を見ることはできなくなった。大手メディアも国の命令に従い、僕たちの「知る権利」は国吊り。何も見えない、知らされない恐怖と闘い続けるのが、ポスト311の日本の日常となった。

そんなとき、もっとも弱き食う、もっとも無視され放置されるのが、避難所の人たちだ。自分たちの家に帰られるのか、仕事はどうなるのか？ 基本的な質問に対する解答が永遠に引き伸ばされ続ける。その宙ぶらりの時間を記録母を失った。農地全てを流された父とともに避難所暮らしを続けながら、震災翌日に予定された救助活動がベント・水素爆発により中止となったことを悔やんでいる。原発事故により助からなかった命は少なくない。そう訴えつつ、次の人生を模索してゆく。避難から3ヶ月後初めて一時帰宅が許され、無人地帯となった故郷へ帰還する彼が見たものとは…？

原発により1960年代以降経済的繁栄が約束されてきた場所・双葉町。町民は、いまだ奪われた家・土地・財産の補償を受けずに、5年以上とも言われる避難生活を続けている。

高校の教室に畳を敷き、10～20人で寝食を共にする共同生活。毎日のお弁当で命をつなぐ。肝心の原発事故は収束したのかどうか定かではない。時間が経つにつれ東北の復興が加速してきても、取り残されていく避難所の日々。

先進国日本の片隅で忘れ去られて行く人々。先の見えない待つだけの避難所の時間をカメラは9ヶ月にわたり記録した。日本の原子力政策の成れの果てがここに凝縮されている。

何も見えない、311後の日本は、何も見えないことにフラストレーションを抱えてきた。あの原発で何が起こっているのか？ 原子炉の中はどうなっているのか？ 放射能はどこへいったのか？ 自分は被爆したのか？ 被爆したとしたら、どうなってしまうのか？

今回の事故で日本政府と東電の対応はとても似通っていた。事実の公表をさけ、「健康にただちの被害はない」という文言に終始する。肥大する政府不信と東電不信…日本国民だけでなく、世界中からも不信を買ってしまった…国が推進してきた原子力政策。それが破綻を来し、危険だという理由から、警戒区域の中を見ることはできなくなった。大手メディアも国の命令に従い、僕たちの「知る権利」は国吊り。何も見えない、知らされない恐怖と闘い続けるのが、ポスト311の日本の日常となった。

そんなとき、もっとも弱き食う、もっとも無視され放置されるのが、避難所の人たちだ。自分たちの家に帰られるのか、仕事はどうなるのか？ 基本的な質問に対する解答が永遠に引き伸ばされ続ける。その宙ぶらりの時間を記録しなければいけない。忘れ去られてはいけない。そんな強い衝動に駆られて、僕はキャメラを手にした。まだ地震・津波の被害状況ばかりがニュースで、その甚大さばかりが強調された2011年3月末のことである。

この映画は、避難民の時間を描いている。1日や1週間のことではない。延々とつづく原発避難。今回の原発事故で失われたのは、土地、不動産、仕事…金で賠償できる物ばかりではない。

人の繋がり、風土、郷土と歴史、という無形の財産も吹き飛んでしまった。それに対する償いは、あんいに誰も用意していない。用意できるものでもない。

そして、僕たちはその福島で作られた電気を使いつづけてきた。無意識に、故郷愛の側に立ってしまっていた、いや我々は実電じゃないんだから、加害者じゃない、というかもしれない。本当にそうなのか。地方に危険な原発を背負わせる政府を支えてきたのは、誰なのか。そんな犠牲のシステムに依存して、電気を使ってきたのは誰なのか。いま僕たちの当事者意識が問われている。

【監督】
舩橋淳（ふなはし あつし）
映像作家。東京大学教養 学部表象文化論分科卒後、ニューヨークで映画制作を学ぶ。長篇映画「echoes」は広島アジア国際映画祭で審査員特別賞、観客賞を受賞。第2作「BIG RIVER」(主演オダギリジョー、製作オフィス北野)はベルリン映画祭、釜山映画祭でプレミアと銘うわる。またニューヨークと東京で時差問題を扱ったドキュメンタリーの監督も続けており、アルツハイマー病に関するドキュメンタリーでネクサー賞を受賞。 今作の撮影過程を記録した著書「フタバから遠く離れて ―原発問題からみた原発と日本社会（仮題）」を今秋出版予定。

【劇場用映画Feature Films】
2012 「桜並木の満開の下に（仮題）」（2013年公開予定）
2012 「フタバから遠く離れて(NUCLEAR NATION)」
2009 「谷中霊園(Dove in the Valley)」（2010年全国公開）
2006 「BIG RIVER」(2006年全国公開)
2001 「echoes」(2001年全国公開)

PRODUCER'S NOTES

「そのとき、自分には何ができるのか？」

【プロデューサー】
橋本佳子（はしもと よしこ）
1985年よりドキュメンタリージャパン代表を20年間務める。ドキュメンタリー番組を中心に数多くの受賞作品をプロデュースし、現在も精力的に作品を作り続けている。国内として、放送文化基金個人賞、AFP個人特別賞、日本女性放送者懇談会賞受賞。言語教員（言語道具、民間放送連盟賞、地方の特代映像祭賞などの審査員や 座・高円寺フィルムフェスティバル実行委員を務める。
プロデュースした映画作品は「道 Der Ausflug」(86分/1999/監督：五十嵐久美子)、「パンダフルライフ」(100分/2008/監督：毛利亜)、「ニッポンの蝿」(114分/2012/監督：長谷川三郎)、「dear hiroshima」(90分/2012/監督：リンダ・ホーグランド)がある。

2万人以上の死者・行方不明者を出した2011年3月11日の東日本大震災、そして最悪の事態を引き起こした福島第一原発の事故。震災の翌日、一号機水素爆発の直後に出された避難指示により、住民たちは着の身着のまま避難を余儀なくされ、大量の「核・難民」が生まれてしまった。

双葉町は原発から3キロのところに立地している。福島県の一時避難所から、3月19日に役場機能を250キロ離れた埼玉県に移し、避難住民の3ちゃ約1200人も一緒に移動した。さらにその後、3月末に、映画の舞台となった同県の廃校（加須市／旧・騎西高校）に再び移動した。以来、現在にいたるまで人々は教室で暮らし、子供達はここから近所の学校へ通っている。故郷の町は、災害基本対策法に基づく警戒区域に設定され、民間人には、立ち入りが禁止されたままだ。

この未曾有の事態を前に、日本中で多くの人々が「自分に何ができるか」を問うた。舩橋淳はディレクターとして、私はプロデューサーとして悩み抜いた末、震災後3週間目から、この廃校に暮らす双葉町の人々を記録する事にした。彼らのおかれて不条理な状況に共に苦しみ、共に怒りカメラを回し続けた。

日本の原子力発電所は1960年代以降、せまい国土に次々と建設された。現在、アメリカ、フランスに続いて、「54基」（世界第3位）そのほとんどが、福井、福島、新潟など限られた地域に集中して、海沿いに立地されている。電力を消費する東京などが大都市ではなく、発電所の多くは電力の消費地とは無縁の産業の乏しい場所に建設された。何が起きても原発は安全だという神話と原発交付金などと立地する自治体にばらまかれたお金。そうして地域活性化、雇用促進の名の下に次々と原発が建設されていった。大都市で暮らす私たちは、そのことにあまりにも無自覚であった。

出稼ぎの町だった双葉町にとって、原発はお金を生み出す魔法の杖だった。町は原発との共存共栄を掲げて発展して来た。双葉町を見つめる事は、とりもなおさず日本の産業構造が生み出した歪んだ原子力行政を問い直す事に他ならなかった。

震災から1年近くたった現在でも、福島県外に避難した人々は6万人を超え、この廃校にも、まだ役場とともに600人以上の人々が暮らし続けている。1月、政府は放射性物質に汚染された廃棄物の貯蔵施設の受け入れを迫られて、町長は野田首相にこう質問した。「私たちを国民だと思っていますか、法の下の平等が保障されていますか」と。

「ノアの箱船」のような廃校に暮らす人々は、故郷の双葉町にいつ戻ることができるのか？5年後？20年後？30年後？その答は誰にもわからない。

しかし、舩橋と私は彼らが故郷に帰るその日までカメラを回し続ける。

フタバから遠く離れて
NuclearNation

2012年／日本／96分／HD／カラー
【制作・配給】ドキュメンタリージャパン、ビッグリーフィルムズ
【宣伝】bond production k.k.　【提供協力】jabylime
【監督】舩橋淳　【プロデューサー】橋本佳子
【撮影】坂根厚、山崎裕　【音楽】坂本龍一
【エンディングテーマ(for futaba)作曲・演奏】坂本龍一
【出演】双葉町のみなさま、双葉郡のみなさま

【宣伝お問い合わせ】
bond production k.k.(佐々木隆郎)
TEL:090-7405-6715
Email:sasaki@bond-production.com

【配給・その他のお問い合わせ】
プレイタイム(片岡陽)
TEL:03-6780-2202　MOBILE:080-3732-6809
Email:yosato98@mail.com

10月13日［土］よりオーディトリウム渋谷ほか全国順次ロードショー！